

# 広島を振りかえつて

長井文雄

私の被爆体験は十歳、小学校四年生のときです。

父は早世し、母と姉、妹と一緒に広島市で暮らしていました。家業は今でいうメッセンジャー、まあ、平たく言えば便利やのような仕事を営んでいました。

その日、朝から警戒警報が発令されましたので、私は上天満国民学校から早退しましたが、警戒警報が解除されたので、隣の友達と表で遊んでいました。

子供のことですから正確な時刻は覚えておりませんが、青い空の下で気持ちよく遊んでいた一瞬、パッと目の前が明るくなりました。それはあのマグネシューム花火が目の前で炸裂したような強い光でした。もともと、私はその時丁度建物の陰に入っていて、光の来る方向に背を向けた形になっていたので、光も、そして熱線も屈折反射して少し弱まつたものになっていたようです。そのためでしょう。強い光が周囲にみなぎり、そのあとのすごい熱が周囲を覆った感じはしましたが、火傷などの直接被害はありませんでした。しかし、一緒に遊んでいた隣の友達は光の

方向に向かっていいたため、光から一瞬遅く襲ってきた熱線に身体を焼かれ、大きな火傷を負つてしましました。この友人とはその後離れ離れになってしまったので、その後の消息はわかりません。あのとき、もう五十センチ建物から離れていたら、光の方向に向いていたら、と思うと、今でもぞっとなります。私たちの遊んでいたところは爆心地から一・五キロでした。

強い力に押されるように倒されました、ようやく起き上がり、母と姉や妹の方に行こうと思いましたが、目の前の家屋はペしやんこになっています。家に向かってつぶれた家の屋根を伝つて我が家にたどり着きましたが、そこには母や姉たちは居ませんでした。必死に付近を捜したのですが、見渡す限り家も壦も木立ちも倒壊しているし、人々は右往左往している。どこからか煙が立ちのぼつてくる。

「逃げろ逃げろ」という声が聞こえ、私も何が何やらわからぬうちに、これからもっと恐ろしいことが起きるのではないかと思い、付近の人たちの逃げて行く方向、山の手の方に走りました。そして三日後、母と姉との再会になったのですが、どうもこのあたりの記憶がはっきりしてないのです。この三日間はどこで何をしていたのか、多分生きて行くためには食事もしただろうし、水も飲んだはず、どこかで寝たはずなのに記憶が吹っ飛んでしまっています。十歳の私にとってあまりに衝撃的な出来事であり、人間には辛い記憶は忘れるという機能がありますので、その

間の記憶は脳の奥底に押し込められてしまつたのでしょうか。

母と姉は辛うじて無事でしたが、三歳の妹は屋根の下敷きになつて帰らぬ人になつたということはその時間かされました。母はその妹を残したままで逃げたことをどんなにか悔やんだことでしょう。その後の生活で位牌の前で茫然としている母の姿がしばしば見られたことがそれを物語つていたと思います。

山の手の方に逃げる途中、川を二つ越えましたが、そこには全身に火傷を負つて苦し紛れに入水した人たちが川を埋めるようにしていましたし、道路には傷を負つた人、着物を焼かれて裸同然の人。「水をくれー」「水をください」と叫ぶ人たちでいっぱいでした。逃げる気力も体力もなくなつた人は道路と言わず瓦礫の中と言わず倒れていきました。私はその中をただ、夢の中の地獄をさ迷つているように歩き続けたようになります。何も考えられませんでした。何が私の周辺に起きたのか。どうして妹がいなくなつたのか。人々が皆こんなありさまになつて逃げ惑つているのか。

でも、誰も教えてはくれませんでした。

しばらくは広島の山の手の方に住んでいたように記憶してますが、「広島にはもうどうしても住めない」という噂がたつて、母の実家のある山県郡の戸川内町に行き、そこで約一年ほど厄介

になりました。

この一年は三人とも栄養失調状態になり、病院と家の間を往復するだけのような生活でした。でも医者は原爆被爆との因果関係は考えていなかつたようです。私も医者もその時はそれだけの知識も探究心もなかつたからかも知れませんが。

いつまでもこうして厄介になつてばかりもいられない。と氣力を振り絞り、山口県のほうに移転。戦後の混乱期をようやく三人家族で乗り切り、三十六年に北海道に渡り、釧路に住んで貴重品販売業に就きました。それから四十年、会社の経営状態が思わしくなつたのを機会に、習い覚えた自動車運転の技術を生かして札幌市でタクシーに乗りました。そして昨年から年齢もあり、フリーになつて、少しほは原爆資料館のお手伝いもできるようになったところです。

札幌に出てきてからといふものは、頸椎間ヘルニアに悩まされ、また、あまり意識はしていかつたのに、健康診断で計つたところ、上が二百になつているところで、その後はずつと血圧降下の薬を飲んで、高血圧対策をしています。また、昨年からは腰椎間のヘルニアにも罹かり、入院もしました。

健康管理手当は高血圧症、肺機能疾患でいただいています。

今思うことは、あの被爆時、みんながばたばたと倒れたのによくぞ助かったものだ。という思

いと、あのとき、私の周辺で妹を始め、沢山の人々が帰らぬ人になったことへの悲しみ。子供だったのですから仕方がありませんが、回りの人たちを助けることが出来なかつたという悔しさ。そして戦争とはいえ、戦争にはほとんど無関係だった女子供老人を標的にして大量殺戮爆弾を落とした国への憎しみです。

これらのことを考えると、原爆は本当に悪魔の武器だと思います。人間が人間らしく生きるために全く必要のないものだと思います。それなのに、世界では核保有国が今でも、存在し、小型原爆をこれからも使う用意がある。などと発言しています。この発言をしている人たちは、自分が、そして自分の家族が原爆の惨禍に遭わなければわからないのでしょうか。私たち原爆被爆者の声が聞こえないのでしょうか。

私はこれからも核兵器廃絶のために小さい声ではありますが、一所懸命皆さんと共に叫んでゆきます。